

礼拝 2020年5月24日(日)

題 『生きた水の流れ』

テキスト：ヨハネ7：32～39

イエスはユダヤ教の三大祭りの一つである仮庵祭の時にエルサレムの町に向かわれました。本来は、仮庵祭とは秋の収穫祭のことで、感謝を持って年を終わり、新しい年を迎えたのです。ユダヤ歴では秋が新年でした。そこに歴史的な意味が加わり、イスラエルの民が砂漠を40年さすらった天幕生活を思い出す意味もあったのです。

それで「仮庵の祭り」と呼ばれるようになったようです。

この時、イエスはエルサレムの町に入られたのですが、すでにイエスの名前はかなり人々の間に知れわたっていたようです。

民衆はイエスがこれまでに行われた数々の奇跡や民衆の心に届いた言葉を見聞きしていたのです。エルサレムの町のある人々は「この人こそ、メシア（来るべき救い主・キリスト）ではないか」と言う人たちも表れていたようです。それを知って、時の宗教的指導者たちは、妬みを持ち、面白くなく、何とかイエスを逮捕する機会をひそかに狙い始めていたようです。現実世界にはこのようなこともあるのですね。

今日の聖書の個所によると、宗教的指導者たちの「32:ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。」とあります。「祭司長」は、ユダヤの最高の宗教的指導者ですが、ここで「祭司長たち」と言われているのは、最高指導者の祭司長のことではなく、多くいた祭司のとりまとめをしていた上の地位にいた祭司たちのことを言っているのだと思われます。ともかく、イエスには逮捕されるかもしれないという緊迫した状態が待ち受けていたのです。

主イエスは自分の所に集まっていた人々に、

33:そこで、イエスは言われた。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。

この言葉は、イエスがやがてエルサレムの郊外のゴルゴタの丘で十字架につけられ、殺され、自分をこの地上に派遣された神の元に帰ることを語っておられるのだと思えます。そして続いて

「34:あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」と語っておられます。

これは、どんなにイエスを探してももう地上においては肉眼の目ではイエ

スを見ることができないということです。イエスを求め頼りとしていた人たち、弟子たちにしてみれば、どんなに厳しい現実でしょうか。「死は関係の喪失状態である。」とも言われています。確かにそうだと思います。しかし、そうなのでしょうか。神の元にあるいのちがあるのです。永遠の命は主と共なる命です。

ユダヤ人は歴史的でもあり、現実的な面があると言われています。現代人に似ているかもしれません。そのことが35節のことばに見てとれます。

35:すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるともいうのか。」

この時代に、世界には「ディアスポラ」と言われるユダヤ人たちがいました。エルサレムを始めユダヤ地方から離れて外国に「離散したユダヤ人」のことで。歴史的には、紀元前8世紀ごろから海外への離散が起り、その地に住んで会堂を建て、安息日を守る生活をしていたと言われます。なお1世紀末には時のローマ帝国内には150に及ぶユダヤ人の居住地があったとも言われます。今でも、多くのユダヤ人、ユダヤ系の人々が世界中に住み、科学、政治、経済、文学など様々な分野で活躍してきた歴史があることは知られています。

ちなみに、わたしは洲本教会に来てから教会員の親戚にあたる方が編纂された分厚い「ユダヤ著名人名鑑」なる書物を頂き、時々楽しみで見えています。

イエスのことばを聞いた人々の中には、イエスがこれからユダヤ地方を離れて外国の地に出向くのかと勘違い人たちもいたということです。人の話をよく聞く、正しく聞くということは難しことなんだなと思います。わたしを含め、自分の思いを優先してしまい、勘違いして聞くこともあるのかもしれません。イエスは聖書の中で「聞く耳のあるものは聞きなさい。」とよく言っておられます。

36:『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。」

この時の、ユダヤの多くの人々は、迷いの中に入り込んでしまってイエスの言葉を理解できなかったのではないかと、思われます。

今日の場面の聖書箇所を読んで、イエスのことばを聞く人々の勘違い、自分のことも含めてですが「ヒトは自分の聞きたいことしか聞かない。」と言う風にも思えたのです。見るとか、聞くことには、どこか自分というフィルターがかかってしまい、どうしても自分の判断に固執してしまうことがあるような思い

たのです。正しく聞くためには、まず神さまの前に静まり、神と人の前に謙虚な心を保つという繰り返しの作業が必要なのだと思います。礼拝はそのためにも与えられているかけがえのない時であり場所でもあると思えます。

さて、聖書に「生きた水の流れ」と小見出しついている、いつまでも心に深く残るイエスさまのことばがあります。

37:祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大

声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て

飲みなさい。」 38:わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

主イエスは、そばにいた人々に呼びかけられ、招かれたのです。ここにいる私たちひとりひとりも時を超えて今日、この場所で招かれているのです。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」と。

「 38:わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

イエスを信じ、信頼し、受け入れる者は、誰でも、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。これは旧約聖書時代から預言されていた言葉が用いられています。預言者イザヤ書 1 2 章 3 節 (P1079)「あなたたちは喜びのうちに救いの泉から水を汲む。」と言われ、エゼキエル書 4 7 章 1 節以下 (P1374) 9 節に「川の流れて行く所はどこでも、群がるすべての生き物は生き返り、魚も多くなる。この水が流れる所では、すべてのものが生き返る。」とされています。

「その人の内から」は「心の奥底から」の意味であり、「生きた水」とは、神さまの力である聖霊のことです。それは「人を生き活きと生かす力」です。わたしたちがたとえ、気落ちしてしまい、気力もなく、死んでいるかのような心でも、神さまには、聖霊には、生き返らせてくださる力があるのです。

イエスの体から生ける水が川となって流れ出すことが前提となっています。

この生ける水がイエスを信じる者たちの心をも潤していくのです。

「川となって」とは、「何本もの川」と理解してよいようです。

人は神の御子イエスにつながり、神さまを信頼して生きる時、たとえどのような状態に陥ったとしても、どこにいても、多様な場所に流れる、きれいな生ける水の流れの中を生きて行けるという約束として受けとめたのです。この川の流れる所、すべてのものが生き返ると記されています。神の力である聖霊は、弱った心を生き返らせてくださる力なのです。ですから「聖霊よ、来てください。」と祈るのです。 この霊、聖霊が、イエスの十字架と復活の後、神さまか

ら与えられて地上に主イエスの教会が誕生したのです。

わたしたちは、神の力、善き力である聖霊が降った豊かな時の中に招き入れられ生かされていることを覚えて日々、イエスさまがくださる命の水を飲んで生きて生きたいと願います。

◆下役たち、イエスの逮捕に向かう

32:ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。

33:そこで、イエスは言われた。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。

34:あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」

35:すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるともいうのか。

36:『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。」

◆生きた水の流れ

37:祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。

38:わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

39:イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていなかったからである。なかった。